

**成人期に肺動脈弁狭窄症を診断され、
経皮的肺動脈弁拡張術を施行した一例**

(財)田附興風会医学研究所北野病院 心臓センター¹⁾

(財)田附興風会医学研究所北野病院 小児科²⁾

近畿大学医学部奈良病院 小児科³⁾

福田 旭伸¹⁾、春名 徹也¹⁾、伊藤 秀裕¹⁾、安部 朋美¹⁾、佐々木 健一¹⁾

中根 英策¹⁾、宮本 昌一¹⁾、佐地 嘉章¹⁾、和泉 俊明¹⁾、植山 浩二¹⁾

猪子 森明¹⁾、野原 隆司¹⁾、吉田 葉子²⁾、渡辺 健³⁾

心房細動および右心不全を呈してはじめて肺動脈弁狭窄症を指摘され、経皮的肺動脈弁拡張術(PTPV)にて症状の改善を認めた一例を経験した。症例は60歳女性。小学6年生時に、心雑音を指摘されていたが、放置していた。入院2ヶ月前より労作時の息切れ、全身倦怠感を自覚。入院1ヶ月前に健診で心房細動を指摘され、近医にて心不全を指摘され当院受診。心エコー上、肺動脈弁狭窄症を指摘され、右心カテ上 sRVP: 100~130mmHg で、PA-RVP 較差>80~100mmHg であり、心エコーの他、MDCT、真空内エコーを使用し、肺動脈弁輪径を確認した後に double balloon 法にて PTPV を行った。

肺動脈弁狭窄症は先天性心疾患で最も多く、多くは小児期に診断され、心不全発症前に治療され、長期成績は良好であると報告されている。一方、本症例のように成人期に心不全を発症するケースは比較的少ない。成人期に診断され、侵襲的治療を要する症例に関して、本症例をふまえ、若干の文献的考察を加え提示する。